

# 不知代経浪乃去邊白不母

——宇治河邊作歌から見る人麻呂の表記態度について——

月 岡 道 晴

## 一 はじめに

万葉歌は『萬葉集』に記された漢字文字列を通じてのみ読者と繋がり得る。従つて歌の文字列における特質も表現の一部として読み取られるべく、歌の書記者によつて選り取られたと考へるべきだろう。そのように考へる上で人麻呂の作に看過できない一首がある。

柿本朝臣人麻呂從<sup>一</sup>近江國<sup>二</sup>上來時至<sup>三</sup>宇治河邊<sup>一</sup>  
作歌一首

物部能八十氏河乃阿白木尔<sup>I</sup>不知代経浪乃去邊<sup>II</sup>白不母<sup>III</sup>  
(③二六四)<sup>I</sup>

此歌を「もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ浪のゆくへ知らずも」と訓むことは動くまいし、鑑賞面でも既に橘守部『萬葉集檜婦手』<sup>(2)</sup>に総て言い尽くされている感が

ある。

此は一卷に、過<sup>二</sup>近江荒都<sup>一</sup>時作歌とある度の歸路にて、さばかりなる大官所の速みに跡かたもなくなりぬるに、有爲轉變の世を感じてよめる也：(中略)：其木どもは川瀬に垣を結びたる如くなれば、より來る浪のしほ<sup>ト、コホ</sup>し滞るかと思れば、やがて、漏<sup>キ</sup>くゞりてゆく方知らず成り行くを、彼の近江宮より世の盛衰變易を嘆息せられたるなり。すがた高く意味深くすぐれたる歌なるべし。かく見れば此物乃部能八十氏は少し下へか、りて心しらひあるにやあらん。誠に其心以て解かば、  
●一首の意は、こたび大津宮の荒れたる跡を見、百官も其半は忽ちに滅び失せたるを見れば、物部の八十氏と別れたる氏々の人とても、宇治川の網代の杙にしほしいさよひ滞るばかりの世の中にして、つひの行くへ

は知りたきわざなるよ、といふなり。

(傍線引用者。以下同じ)

即ち、これは宇治川の網代木にいさよう浪の行方がわからないことを詠んだ歌だが、そこに大津宮に仕えた氏族たちの行方の知られないさまが重ねられているというのだ。この効果に大きく関与しているのが、冒頭二句の序とその表記であることは疑いない。小野寛は、

たくさんの氏族で構成されていることから「もののふの八十氏」と言い、これを「宇治川」の名にかけて歌ったのは、人麻呂のこの歌より以前には見えない。

と指摘しており、また八木京子は、人麻呂の「ウヂ」表記には二四二八歌に「宇治度」と音仮名表記されている他に、二四二七・二四二九・二四三〇歌に「是川」とあるばかりで、

「宇治」の歌内部での表記(題詞他には「宇治」と記される)は人麻呂の一例をもって他になく、「宇治」が通行の表記であったかの保証はない。いずれにせよ、人麻呂にとって「ウヂ」の音を示す幾つかの表記の仕様が、当該歌にあたって既に可能であったことは否めまい。その中で「氏」の文字が選ばれたことはやはり無意味に仮名を宛てたものとは思われないのではないか。

と述べている。更に八木は「氏」が訓仮名であることに注目しつつ、意味要素をも同時に伝達してしまう訓仮名は表音文字として効率的でないとの橋本四郎の指摘を踏まえて、重要となるのは、「もののふの八十氏河」と「氏」表記をすることによって、(中略)：歌の歴史的背景を髣髴とさせることによって、一首の歌がらの心髄にまで影響を及ぼし得ているという点であろう。：

(中略)：伝達要素として主要素であるはずの固有名詞が、訓仮名によって示され、またそのように恣意的に表記することによって、「八十氏」なる意味を醸出させる方向に、歌全体が大きく傾いていることは、歌を記す文字の在り方として注視されてよい。

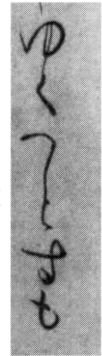
(傍点も引用者。以下同じ)

とも述べている。ここで注意されるのは訓仮名の特性を意図的に利用することで、此歌に近江朝廷の「八十氏」の記憶を喚起させる方向に読者を導こうとしている点だ。これは歌全体の表記の意識もそのような方向性を有するのではないかということを示唆させる。

以上を踏まえて当該歌を眺め返すと、此歌の表記が異例に満ちていることに気付かざるを得ない。一つは二箇所もの上代特殊仮名遣いの違例で、先掲本文「I」の箇所「網代木」のシロ(乙類口)に「白」(甲類口)字が宛てられ

ていること、及び「Ⅱ」の箇所「不知代経」のヨ（甲類）に「代」（乙類）字が宛てられていること。もう一つの箇所「Ⅲ」は訓仮名に「不」の字が下接している集中孤例の表記で、この奇妙さは類聚古集の本文が逆説的によく表わしている。これについては澤瀉久孝『萬葉集注釋』の説明を拝借して解説しておきたい。

類聚古集には「白」の字無く「不母」との間にしるしをして右に「白」を加へてゐる。これによると不白といふ事になるが、さういふ表記法はなほさら例のない事であり、「白」を脱し「不知」の例によつて不用意に「不」の下へ入れようとしたものかと思はれる。



この解説から「白不」の文字列が類聚古集の筆者にどれほど不自然なものと捉えられたのが想像できよう。「不白」ならばまだわかると考えたのかもしれないが、その結果「なほさら例のない」文字列が生じることとなつてしまつた。こうした不自然さの根底は「シラズ」のシラに訓仮名「白」字を宛てたことに求められる。竹尾正子<sup>7)</sup>が、

活用語を打消すために、「不」を使用する場合は、必ず正訓の活用語の上に被ぶせるのが常であつた：（中

略）：人麻呂は「白」を借訓として用いたために、その常識を破つて「白」の下に持つてきたのはさすがだと思ふ。そこに人麻呂の表記における獨創性の躍如たるさまを見ることが出来る。

と説くように、おそらくアジロキの「白」とユクヘシラズモの「白」は、浪の白さを印象付けるべく重ねられた用字だろうし、イサヨフを「不知・代・経」と表記することもまた歌全体での文字選択の方向性と呼应しつつ、「幾代を経たかわからない」という内容を重ね書きしていると推察される。なおこうした見解は日本古典文学全集『萬葉集』の頭注が、

なお、代の口は乙類、白の口は甲類で仮名遣いの上では違例。白の視覚的効果をねらつた用字か。：（中略）：このヨも仮名遣いの違例であるが、幾代を経たかわからないという気持を、「不知代経」の字に託した用字か。：（中略）：原文「白」は阿白木と同じく視覚的効果をねらつた用字か。

と既に述べているところだ。だが、所謂上代特殊仮名遣いの本質が単に仮名遣いにあるのでなく、当時の音韻一般の問題であることを明らかにしてきた研究史を省みると、このように音韻を超越して筆記者が恣意的な文字列を記すという営為が可能なのかどうか躊躇いを覚えざるを得ない。

またそれがあり得るのだとしたら、どのような条件下においてそれが可能だったのかを考察する必要も生じるだろう。本稿では、まず当該歌の文字列を『萬葉集』一般の表記と照合した際に、どのような水準のものであるのかを確かめたい。

## 二 人麻呂関係歌における表記と音の関係

前章では当該歌の文字列が異例尽くしであり、特にそれが上代特殊仮名遣いにおいて顕著に見られることを述べてきた。だがこのような様態は、当該歌のみに格別に見られるものなのだろうか。もし類例があるならば、それは「人麻呂」の名を冠する集中の他の歌うたの表記の水準と比較した際にどのような関係を有するのだろうか。右に確認してきた当該歌の表記の特殊性は本稿の初めて指摘することではないが、その評価についてはまだ通説ができていないと言えない。例えば西宮一民は『萬葉集全注』巻第三の注のなかで、

人麻呂には時折このような仮名違いがあるが、このように一首中に二つも混るのは珍しい。また結句の原文「白不<sup>シヤク</sup>」の表記も借訓・正訓で不均衡である。「白」の字についてのみ言えは、泡の白さを特に意識したために「阿白木」と仮名違いを犯し、「白不」と不均衡

をしでかしたのもあろうか。

と述べており、その評価は「仮名違いを犯し」、「不均衡をしでかした」などと否定的だ。また廣岡義隆は、卷三の人麻呂作歌の詠歌順について疑問を呈するなかで、

それにしてもこの一首の表記は特異であり、到底人麻呂自身の表記とは思はれない。

この表記とは別に、以前から気になつてゐたことがある。それは、人麻呂の詠歌順からすると「夕浪千鳥」歌（二六六）が先で、この宇治歌（二六四）が時日的に後であるのに、卷三の配列では逆になり、間に二六五番歌まで入つてゐることである：（中略）：

まだよくわからないところがあるが、この二六四番歌は後の（と云つてもさほど降らないが）、切り継ぎ歌であらうということである。二六三番歌の

従近江國上来時刑部垂麻呂作哥一首（二六三番歌）  
題詞）

と同じ近江よりの「上来時」の詠といふことで、後に、

柿本朝臣人麻呂従近江國上来時宇治河邊作哥一

首

の題詞と付けて、二六三番の次に切り入れられたに違ひない。かう見ると、人麻呂らしからぬ特異な表記も何人かの手を経た後代のものゆゑと推測出来、二六四

番歌との逆順序も納得出来るものとなる。

と述べて、傍線部のように此歌の表記の特殊性を後代の切り継ぎのためと解釈している。上代特殊仮名遣いの違例は万葉歌において通常あり得ないという立場を堅持する限り、当該歌の表記をこのように評価し解釈することは当然だと言えよう。しかし「人麻呂」と名を冠する歌を一覧する際、我々は極端に特殊な仮名の用法があることに気付かされる。夙に澤瀉久孝は、人麻呂における枕詞「あしひきの」における仮名遣いの甲乙について、

阿志比紀能——山田を作り (允恭記)

阿資臂紀能——山田を作り (允恭記)

足日木乃——山のしづくに (卷二、一〇七)

大津皇子

足曳之——山かも高き (卷十、二三—三) 人麻呂集

足引——山道も知らず (卷十、二三—五) 人麻呂集

…(中略)…然るにこゝに注意せられる事は、右にあげた記紀の場合は「あしひき」の「き」が橋本博士の所謂乙類の假名「紀」が用ゐられてをり、大津皇子の御作の場合も乙類に属する「木」であるからやはり「紀」の假名が用ゐられたと同様に見てよいわけであるが人麻呂集の場合は「引」或は「曳」が用ゐられてゐるから、共に動詞の連用形になるわけで、橋本博士

の所謂甲類即ち「岐」の類の假名が用ゐられてゐると同様に見なければならぬ事である。

と指摘しており、人麻呂における枕詞の再解釈の営み——例えばソラミツを「天尔満(そらにみつ)」「(①二九)とし、ヤクモタツを「八雲刺(やくもさす)」「(③四三〇)として用いるような試行の中に、こうして上代特殊仮名遣いの甲乙の区別までもを乗り越えて再解釈している例を報告している。そこには卷九挽歌冒頭「宇治若郎子宮所歌一首」の、  
妹等許今木乃嶺茂立孀待木者古人見祁牟

(人麻呂歌集⑨一七九五)

〔妹等がり今木の嶺に茂り立つ孀待つの木は古人見けむ〕

のような掛詞式の枕詞の場合をも参考に入れ得るだろう。かめいたかしはこの措辞に、

地名イマキのキはキの乙、これを「き(来)」——これはキの甲——によみかえてイモラガリをかぶらせたところがみぞ、すなわち、ひとのすなおな期待をはぐらかし、この「はぐらかし」をもってことばのたわむれのそのおかしみにひとの気をひこうという、そういう手のこんだ、ただの秀句よりもいっそうひねった、そういうわるだくみ

があると述べて、そこに「つよい表現価値とそれにもとづ

くあざやかな印象」とを読み取るうとしている。こうした例は枕詞や序詞の場合の他にも、

足利思代あしひ滂行はうぎやう舟薄ふねうす高嶋たかじま之足速あしはや之水門みづかど尔極尔監みま鴨かも

〔あどもひて滂ぎ行にし舟は高嶋の足速の水門に極てにけむかも〕〔高市歌一首〕人麻呂歌集⑨(二七一八)

などにも見られる。アド、モフのドの音は、高市皇子殯宮挽歌に「御軍士をあどもひ賜ひ〔安騰毛比賜〕」(②一九九)

とあるように本来乙類の仮名を宛てられるべきところだが、此歌では甲類の「利」が宛てられていて甲乙の違例となっている。これは単なる違例なのではなく、この直後の一七三四歌において此歌と同じ地名を、「高嶋之足利湖〔高嶋の足利の湖〕」と同じ仮名遣いで記していることと対応して読み取られるべき用字だと考えられる。日本古典文学全集『萬葉集』の頭注がこの表記について、「阿波思ひて〔阿波の湊をさして〕の意をかけたものか。」と説明していることを本稿でも肯つておきたい。

このように通例とは異なる仮名遣いを用いることで、歌の文脈に特別な意味を上書きしようとする態度は、「人麻呂」の名を冠した歌においては、上代特殊仮名遣いの場合のみに留まらず、清音濁音の区別についても同様にあらわれている。

長皇子遊「獨路池」之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并

短歌

八隅知之吾大王 高光吾日乃皇子乃 馬並而三獨立流  
弱薦乎獨路乃小野尔 十六社者伊波比拜目 鶉己曾伊  
波比廻礼 四時自物伊波比拜 鶉成伊波比毛等保理  
恐等仕奉而 久堅乃天見如久 真十鏡仰而雖見 春草  
之益目頰四寸吾於富吉美可聞 (③三三九)

〔八隅しし吾が大君 高光の吾が日の皇子の 馬並めてみ獨立たせる 弱薦を獨路の小野に しじこそばいはひ拜め 鶉こそいはひ廻れ しじじ物いはひ拜み 鶉成すいはひもとほり 恐みと仕へ奉りて 久堅の天見る如く まそ鏡仰ぎて見れど 春草の益めづらしき 吾がおほきみかも〕

右の歌では、傍線部のシシジモノという措辞に「シジ〔四時〕」という仮名が宛てられている。シシジモノのシシに「四時」の字を宛てることもまた集中孤例であるが、この仮名が用いられること自体も珍しい。他では例えば「養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌」(⑥九〇七)や「丹比真人笠麻呂下筑紫國時作歌一首并短歌」(④五〇九)に含まれる「しじに生ひたる〔四時二生有〕」という表現に、勿論濁音として用いられた例が見られるばかりだ。此歌ではこの仮名の前後にここが「シシ」と読まれるべく仕掛けが張り巡らされていることに注

意を払っておきたい。点線部にはヤスミ〔八隅〕、ミカリ〔三蕩〕、シシ〔十六〕、シシ〔四時〕、メヅラシキ〔目頼四寸〕と多くの数字表記が散りばめられており、殊に傍点部の「し、しこそはい這ひ拜め」と「し、し物い這ひ拜み」との対句では、互いに読みやすいように「十六」という表記と「四時」という表記とが対応して配置されている。人麻呂の歌集や作歌ではこのようにことばの音を正確に表わすことよりも、仮名に否応無しに付随してくる文字の表意性を意識して統一的に用いることで、喚起されてくるイメージの側を優先する姿勢が随所に見られるのである。

ここに更に繰り返し式の序詞の例、

度會大川邊若歷木吾久在者妹戀鳴

〔羈旅發思〕人麻呂歌集⑩(三二二七)

〔度會の大川の邊の若歷木吾が久ならば妹戀ひむかも〕を掲げれば、音の清濁の違いが歌の修辭によつて乗り越えられることについて確信をもたらすことができるだろう。

ここでは序詞によつてワカ、ヒサとワガ、ヒサの音を清濁に頓着せず繰り返していることが見て取られる。木の名であるヒサギについても、集中四首にあらわれるこの植物に「歴木」の字が宛てられる例はやはり唯一だから、そこには「歴」字と「久」字とを対応させて用いる意識がやはり強くもたれていることが推測される。

玉響昨夕見物今朝可戀物

〔正述二心緒〕人麻呂歌集⑩(三三九一)

〔玉かざるまのゆみ昨夕見し物を今朝に戀ふ可き物か〕

朝影吾身成玉垣入風所見去子故 (同三三九四)

〔朝影に吾が身は成りぬ玉かざるほのかに見えて去にし子故に〕

右に掲げた卷十一の人麻呂歌集正述心緒歌の二首のうち、これもまた集中で唯一の語形となる後者のタマカキルの訓については、西宮一民13や鶴久ら14によつて訓仮名に清濁の區別が存在するのが明らかにされたことが参照されなければならぬ。殊に鶴論では、訓仮名の清濁に両形が認められるのは、連濁と関係する第一音節の場合のみであること、そして「第二音節・第三音節が清音の場合、それを濁音表記にあてたり、第二音節・第三音節が濁音の場合、それを清音表記に用ゐたりすることは極めて少数で、…(中略)…清濁表記は頗る明確に區別され」ていることが指摘されている。つまりこの説明に従うならば、万葉歌一般の表記に即する限り、二三九四歌の文字列「玉垣入」がタマガキルの語形を表わすことはあつても、タマカギルを表わすことはあり得ないことになる。<sup>15</sup>

しかし一方で人麻呂歌集には直前の二三九一歌に「玉響」との表記もあり、これを佐竹昭広の著名な論文16に従つ

てタマカギルと訓むのだとすれば、同じ歌集の殆ど隣り合う歌にタマカギルとタマカキルの両形の用語例を認めなければならぬ。前述の鶴論にも、

「玉限たまかきる（一・翌、二・三五〇九、三・三五〇）」「玉蜻たまかきる（三・二〇七他

四例）」「玉蜻蜒たまかきる（六・五五六）」「珠蜻たまかきる（三・三〇〇）」の例や

…（中略）…「迦藝漏肥能かぎらうひの（履中記新訂國史大系122）

等を参照すれば異例であること疑ひないやうである。

…（中略）…當面の問題「玉垣入」は「たまかきる」

と訓讀し、玉かきるは玉かきると共に二重形をなして

ゐたのではないか。それがたまたま人麻呂集にその姿

をとどめてゐるのではないか（傍線原文ママ）

と、両形を想定すべき旨が言及されている。稲岡耕二17はこの表記「玉響」をサヤカニモまたはマサヤカニと訓んでこの問題を回避しながら、二三九四歌の「玉垣入（風）」の文字列について自身が『萬葉集全注』巻第十一に記した、「神社の玉垣の間から入るほのかな風のイメージを文字によつて喚起するものとなっている」との説を肯つているが、ここは二三九一・二三九四歌のどちらかを改訓するとか、人麻呂にのみタマカキルの語形の使用があつたとかなどの特別な想定をしなくても、両歌を万葉歌一般に見られる語形のタマカギルで訓んでよいのではないか。これは勿論、語の音を記す側面から見れば清濁の違例ということになる

うが、こと人麻呂と名を冠する歌においては、以上に見てきた例を念頭に置く限り、語形の音の側面を厳密に記すことよりも、寧ろ稲岡が説くような「イメージを文字によつて喚起する」側面により重きを置いて歌を表記するという選択があり得たと考えられよう。従つてここではタマカギルの語を「玉垣入」と、音の側からは少々強引な文字列で表わしながらも、意味の側では「神社の玉垣の間から入るほのかな風のイメージ」をも読み取らせようとしていると捉えるほうが従来諸説よりも考えやすいのではなからうか。<sup>18</sup>

朱引秦不経、雖寐心異我不念

（「正述二心緒」人麻呂歌集⑪二三九九）

〔朱ら引くはだもふれずて寐たれども心を異には我が念はなくに〕

他にも仮名の清濁については、右の正述心緒歌で皮膚の意味に「ハタ〔秦〕」の字を宛てている例に注意される。

この箇所については『古語拾遺』<sup>19</sup>の注の傍線部に、

長谷朝倉朝に至りて、秦氏分散て、他族に寄隸く。

秦酒公、進仕して寵を蒙る。詔して秦氏を聚め

て、酒公に賜ふ。仍て、百八十種の勝部を率領て、

蚕織はなはちし、調を貢り、庭中に充積む。因りて姓を

宇豆麻佐と賜ふ。（言は、積に隨ひて、埋み益す也。



貢る所の絹・綿・肌、膚に軟かなり。故に秦の字を訓みて、之を波陀と謂ふ。仍て秦氏の貢る所の絹を以て、神を祭る劍の首に纏く。今俗猶然す。所謂秦の機織の縁也。」

とあることを根拠に、岩波文庫版や『時代別国語大辞典』等でこの氏族名をハダとしていることが注意されるのだが、ハタ氏のハタ織りの由縁について点線部で繰り返し述べるこの文脈にあつて、この注だけを根拠に氏族名までをハダと訓み替えるならば、逆に「秦」字をハタと訓み得るこれらの根拠については総て捨象してしまうのかという問題も生じてしまう。また『古語拾遺』の訓注の施注態度について付言するならば、例えば、

此の時に当りて、上天初めて晴れて衆俱に相見るに面皆明に白し。手を伸して、歌ひ舞ひて相与に称て曰く、阿波礼〔言は天晴也〕、阿那於茂志呂〔古語、事の甚だ切なる、皆阿那と称ふ。言は衆の面の明に白き也〕、阿那多能志〔言は手を伸して舞ふ。今楽事を指して之を多能志と謂ふ、此の意也〕、…（以下略）

などの場合に明らかなように、所謂語源俗解を多く含むものであり、語形の説明などにそのまま用いるには留保が必要な材料と言えよう。

翻つて二三九九歌に戻ると、ハダの語に上接する「あからひく」は全四例中三例が人麻呂歌集歌にあらわれ（⑩一九九九、⑪二三八九、⑫二三九九）、その中には卷十の七夕歌、

宋羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

（人麻呂歌集⑩一九九九）

〔宋ら引く色妙し子を數く見ば人妻故に吾戀ひぬべし〕が存在するが、この用字「色妙」は人麻呂自身に「色妙乃枕」（②二二二）の用語例もあつて、シキタへなど寝具類の織物の意を匂わせる文字遣いと見られるから、おそらくこの二三九九歌の表記も、色彩に富んで「肌、膚に軟らか」な織物の風合を異性の肌の意味内容に上書きしようとする意図を有していると考えられる。なおその場合、傍点部に見えるように「触る」の意で「経」の字を宛てることも、他には卷十二の人麻呂歌集寄物陳思歌の例、

妹戀不寐朝吹風妹経者吾与経（人麻呂歌集⑫二八五八）

〔妹に戀ひ寐ねぬ朝に吹く風は妹にし経れば吾にも経れこそ〕

を見るのみであつて、この用字が以下の歌に見えるように「縦糸」の意味もあることから、

経（経）も無く緯も定めず未通女らが織る黄葉に霜な零りそね  
（「大津皇子御歌一首」⑧二五二二）

のように、先に確かめたごとく秦氏と織物の縁によつてこの字が選択されたとも考え得る。

### 三 代と白／いさよふ月

ここまで「人麻呂」の名を冠する歌においては、通例と異なる仮名遣いを用いて歌の文脈に別の意味を上書きしようとする態度がみられることを説いてきた。当該二六四歌の表記もごく特殊な書きぶりではあつても、これが万葉歌においてあり得ないような文字列なのでなく、寧ろ相当に巧まれた様態を示していることが以上から理解されよう。当該歌については、先に傍線部Ⅰの「阿白木」に上代特殊仮名遣いの甲乙違例が指摘されていると述べたが、白と代との甲乙違例は、『萬葉集』全体に実は多くの例を見出すことができる。

しろたへのあがしたごろも〔之呂多倍能安我之多其呂母〕うしなはずもてれわがせこただにあふまでに

〔中臣朝臣宅守与狭野弟上娘子贈答歌〕娘子⑮三七五二

此歌では口の音が乙類の「呂」字で記されているが、同じ一連の歌二首に「思漏多倍乃蘇鳳〔しろたへのそで〕」(三七二五)、「之路多倍乃阿我許呂毛豆〔しろたへのあがころもで〕」(三七七八)とあるように、「白栲」の語にお

けるシロは、本来甲類口の仮名「漏」や「路」字が宛てられるべきところだ。しかもこの違例は同じ短歌連作の歌群中に確認できるものなので、同じ書記者が仮名の甲乙の混乱を起こしていると見做し得るだろう。

氏人の譬へのあじろ〔足白〕吾ならば今はならましこ  
つみ来ずとも (山背作) 作者不明⑦一二三七

次に示したのは「網代」のシロに「白」字が宛てられる場合だ。「網代」は同じ「山背作」の題に括られる歌に「阿自呂人」(二一三五)とあり、また「奈波之呂」(⑭三五七六)ともあつて乙類口の音と知られるが、これが掲出歌では同じ語に、先に三七二五歌や三七七八歌などで確認した通り、一般的には甲類口の音の「白」字を含んで「足白」の字が宛てられている。これは当該歌の「阿白木」と同様の字の宛てかたとして注意され、また歌の詠まれた場所も一一三五歌に「氏河」とあつて、地名の音だけでなく字の書きぶりまでもが共通している。この箇所だけならば、あるいは当該の人麻呂歌の模倣と見做せなくもないのだが、しかし宇治川以外の場所でもこのような「代」と「白」との混用は見られる。

譬白〔譬白〕の濱松が枝を引き結び真幸く有らば亦還  
り見む (②一四一)

ここでも同じ歌群中の「長忌寸意吉麻呂見結松哀咽

歌二首」では「磐代乃崖之松枝〔磐代の崖の松が枝〕」(一四三)、「磐代之野中尔立有結松〔磐代の野中に立てる結び松〕」(一四四)とし、また「柿本朝臣人麻呂歌集出也」と題詞の下に記される「大寶元年辛丑幸于紀伊國時見結松一歌一首」でも「磐代乃子松之字礼〔磐代の子松がうれ〕」(一四六)としてるところを、歌群の冒頭「有間皇子自傷結松枝一歌二首」の一四一歌だけが「白」字を宛てて「磐白」と記している。「代」の語は集中に地名以外で六例しか見られず、また仮名書き例も右に掲出したもののみだ。そもそも「代」と「白」との間には、従来考えられていたほど画然とした甲乙の音の違いは見られないと判断するほうが正確なのかもしれない。

続けて傍線部Ⅱ「不知代経」の表記について検討してみよう。

山のはにいさよふ月〔不知世経月〕の出でむかと我が待つ君が夜は更降けにつつ

(忌部首黒麻呂恨友除来一歌一首)⑥(一〇〇八)  
見えずとも執戀ひざらめ山の末にいさよふ月〔射狭夜月〕をよそに見てしか

(満誓沙弥月歌一首)③(三九三)  
山の末にいさよふ月〔不知夜歴月〕を出でむかと待ちつつ居るに夜を降けにける

(詠月)作者不明⑦(一〇七一)  
山の末にいさよふ月〔不知夜経月〕を何時とも吾が待ち座らむ夜は深けにつつ (同一〇八四)

右は「イサヨフ月」の措辞で共通する歌だが、ここでも多くの歌で文字列の表意性を意識した仮名が宛てられている。イサの音に「不知」の訓字を宛てるのが一〇〇八・一〇七一・一〇八四歌、そして月がイサヨフことから三九三・一〇七一・一〇八四歌において、「夜が経る」意をとって「夜経」か「夜歴」字を宛てている。イサヨフは集中他に「雲」で四例(雲居奈須心射左欲比)③(三七二)、  
「伊佐夜歴雲者」③(四二八)、「多奈婢久君母能伊佐欲比尔」  
「伊佐欲布久母能」④(三五二)、「心」で二例(雲居奈須心射左欲比)③(三七二)※重出)、「村肝心不欲」⑩(二〇九二)を見るのみの表現だが、ここでヨの音は、音仮名「欲」か訓仮名「夜」と甲類の仮名が宛てられている。だが一〇〇八歌ではヨに乙類の仮名「世」が宛てられながら、かつ「幾世を経たかわからない」の意を有する文字列「不知世経」が記されている。イサヨフの限られた用例の中に、当該歌を含めて二例の甲乙違例が存するのは注意せねばなるまいし、またそれが当該歌と同様に文字列の表意性を意識した仮名が宛てられる場合に起こっていることは意識に留めておきたい。

#### 四 シラニとシラズ

続けて傍線部Ⅲ「白不」の検討に移る。前述の通り当該の表記は集中孤例なのだが、しかし集の全体から眺めた際には、これがさほど突飛な表記でもないことがわかる。

霞立つ長き春日の 晩れにけるわづきもしらず、「之良受」…(中略)…草枕客にし有れば 思ひ遣るたづきをしらに〔白土〕…

〔幸〕讚岐國安益郡之時軍王見山作歌〔①五〕

白玉〔白玉〕の人の其の名を なかなかに辞を下延へ  
遇はぬ日の數多く過ぐれば 戀ふる日の累なり行けば  
思ひ遣るたづきをしらに〔白土〕…

〔思〕娘子一作歌一首并短歌 田邊福麻呂歌集⑨一七九  
二)

右のように集中にはシラニに「白土」の字を宛てている例があつて、しかもこれらは歌の文脈を辿ると、シラズやシラタマなど、シラの音を繰り返す場合に多くあらわれてくることに注意される(傍点部)。このような傾向は「白粉」や「胡粉」と記す場合でも同様で、

…速川の往きも知らず、「不知」衣袂の反りも知らず  
〔不知〕馬じ物立ちて爪衝き 為むすべのたづきをし  
らに〔白粉〕…(中略)…玉梓の道來る人の 立ち留

まり何かと問はば 答へ遣るたづきを知らに、「不知」

…〔相聞〕作者不明〔⑬三二七六〕

…處女等が心をしらに〔胡粉〕其を知らむ因の無ければ〔將知因之無者〕…(中略)…人知れず〔人不知〕もとなそ戀ふる 氣の緒にして (同〔⑬三二五五〕

と、ここでも傍点部「不知」を周りに繰り返して配置するなかで「白粉」の字を宛てることができ、また「其を知らむよしの無ければ」や「人知れず」などの類句を周囲に置くなかで更に抽象度の高い訓假名「胡粉」を宛てることが可能になっていると理解できる。

ここから当該歌の表記、シラズを「白不」と記すところに至るまではあと一息だろう。当該歌でもこの用字のすぐ上には、傍線部Ⅰ「阿白木」の「白」や傍線部Ⅱ「不知代経」の中に「不知」の字が配置されていることに注意しておきたい。実際人麻呂歌集の中にも、

淡海と沈白玉不知從戀者今益 (⑪二四四五)

〔淡海の海しづく白玉知らずして戀ひせしよりは今こそ益され〕

という歌などもあつて、人麻呂もまた「白」と「知る」との親和性の強い環境の中で作歌していたことが知られよう。稲岡耕二が『和歌文学大系 萬葉集』の脚注で、「イサヨフ」との関係で「不知」と記すのを避け、特殊な借調表記

「白不」で、白い浪の印象を生かしたか。」と述べていることは、本稿にとつても参考になる。「白不」というこの一見奇妙な書きぶりはこの箇所のみで読み取られるべきではなく、万葉歌一般における「白」と「知る」との一对で密接に結びついた関連性を利用しながら、一首の全体のうちここにシラズと容易く読み取れるような仕掛けを随所にちりばめつつ、そしてまた歌の背景に宇治川の浪の白さを印象させようという意図のもとに用意周到に記されているのだ。このような固定的な繋がりとそれを利用した仕掛けの中において初めて、シラニやシラズは「シラ」と「ニ」、「シラ」と「ズ」に分節され、シラの音には「白」字、そして打消の意味の「ニ」や「ズ」にそれぞれの文字が宛てられることが可能だったのだと理解されよう。

…嘆けどもしるし〔知師〕を無み 念へどもたづきを  
しらに〔白〕 幼婦と言はくもしるく〔知久〕 手  
小童の哭のみ泣きつつ…

〔大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌〕(461-19)  
シラニに「白ニ」字を宛てた右の例では、まず「白」字の前後に「シルシ」や「シルク」など同音の語が繰り返されていることに注意されるが、これらの語に宛てられるのはここでは正訓字ではない。意図的に正訓字を排し、仮名を宛てて「知」字を周到に配置していることが着て取られ

よう。「白」と「知」との繋がりとは同音だからというばかりではなく、寧ろ文字表記の水準でより強く感得される場合もあつたことがここから理解される。

## 五 解釈の無秩序を導かぬために

以上説いてきたことは、人麻呂及びその歌集の筆記者が歌の音を表わすこと一般について冷淡な態度をとつていたことを意味するのではない。人麻呂の名を冠する歌においては、たとえ詩体歌のように助辞を殆ど記さない歌の場合であつても、それが訓み得るよう工夫が重ねられていることはこれまでの研究史が明らかにしてきたところだ。だが当該二六四歌などの場合のように、歌全体における文字の表意性を統一的に用いることでイメージを喚起させる側面により重きが置かれる際には、歌の音を正確に記すことに對しては比較的頓着せず文字列を並べてゆくという姿勢が、人麻呂の名を冠する歌においては人麻呂作歌にも人麻呂歌集にも共通して観察することができるのである。従来は助詞や助動詞の表記率等から「人麻呂」と名を冠する万葉歌の書記傾向の共通性について論じられてきたのだが、これら歌うたの表記の傾向をどのように定位することで、人麻呂作歌と人麻呂歌集の筆記者の関係についてもまた新たな考察材料を得ることができるのかもしれない。しかし

ながら本稿が万葉歌の解釈におけるパンドラの箱を開けてしまった虞れをわたしは抱いている。上代特殊仮名遣いの区別ですら表現が乗り越えてしまいでるのならば、もはやどのようなアナグラムですら解釈の名の下に正当化されかねないからである。本稿はそのような危惧に対して、ひとつの方法的な歯止めとなることも企図して記したつもりだ。読者諸賢にこの危惧が正しく共有されることを願いたい。

## 注

- (1) 本稿における『萬葉集』の引用は、搞書房補訂版(平一〇)に拠りながら私に書き下して用いたが、一部本文を改めたところもある。
- (2) 橘守部『萬葉集檜孺手』の引用は、萬葉集叢書第三輯(大二三、古今書院)に拠る。
- (3) 小野寛『万葉集抄講読(六十三)——宇治川の網代木にいさよふ波——』(四季短歌会『四季』一二二、昭六〇・三)
- (4) 八木京子「人麻呂の転義的(懸詞的)枕詞——音と意味との関わりから——」(『美夫君志』五八、平一一・三)
- (5) 橋本四郎「訓仮名をめぐって」(『萬葉』三三三、昭三四・一〇、『橋本四郎論文集 国語学編』(昭六一、角川書店)に収載)
- (6) 『類聚古集』の引用は臨川書院版(昭四九)に拠る。
- (7) 竹尾正子「白不母」考(『活水論文集 日本文学科編』二六、昭五八・三)
- (8) 廣岡義隆「人麻呂の宇治歌一首」(『三重大学日本語学文学報』一、昭六〇・三)
- (9) 大野晋「萬葉集卷十八の本文に就いて」(『国語と国文学』二二一三、昭二〇・三、四合併号)が卷十八の計十八首に集中して、①他巻にない用字(事(シ)、川(ツ)、根(ネ)、野(ノ))、②平仮名字体の「へ」と「元(元暦校本)、③上代特殊仮名遣いの違例(二二箇所)、④平安時代中期まで区別されたア行エとヤ行エの混同が頻出することを指摘し、梨壺の五人が古点を加点了際にこの箇所が補修されたと推測していることが想起される。なお補修説に関しては、①が卷十八の補修部とされる箇所のみ偏るわけではないことを乾善彦『万葉集』卷十八補修説の行方(『高岡市万葉歴史館紀要』一四、平一六・三)が明らかにし、天曆期以降の複数回にわたって改変が加わったことを想定している。
- (10) 澤瀉久孝「枕詞を通して見た人麻呂の獨創性」(『萬葉の作品と時代』(昭一六、岩波書店))
- (11) かめいたかし「文字をめぐる思弁から、龍麿かなづかいのゆくえを追う」(『成城文藝』八五、昭五三・三、『亀井孝論文集』五(昭六一、吉川弘文館)に収載)
- (12) かめい論及び遠藤邦基「音韻資料としての掛け詞——八行音とその周辺を中心に——」(『王朝』五、昭四七・

五、「ハ行音価と掛詞修辭」と改題して『国語表現と音韻現象』（平元・七、新典社）に収載）や、蜂矢真郷「上代特殊仮名遣に關わる語彙」（『萬葉』一九八、平一九・六）が仮名遣いの甲乙の異なる掛詞について多くの例を掲げている。

(13) 西宮一民「上代語の清濁——借訓文字を中心として——」（『萬葉』三六、昭三五・七、『日本上代の文章と表記』（昭四五、風間書房）に収載）

(14) 鶴久「萬葉集における借訓假名の清濁表記——特に二音節訓假名をめぐる——」（『萬葉』三六、昭三五・七、『萬葉集訓法の研究』（平七、おうふう）に収載）

(15) 井手至・毛利正守「新校注 萬葉集」（平二〇、和泉書院）がここをタマガキルと訓む。

(16) 佐竹昭広「音と光——「玉響」解説の方法——」（『国語国文』二二一八、昭二八・八、『佐竹昭広集』二（平二一、岩波書店）に収載）

(17) 稲岡耕二「玉響」「玉垣入」はタマカギルか——人麻呂の工房を探る（其の一）——」（『論集上代文学』二六、平一六、笠間書院、『人麻呂の工房』（平二三、塙書房）に収載）

(18) 廣岡義隆「風字攷——「ほのか」と「はろか」及びその周縁——」（西宮一民編『上代語と表記』（平一二、おうふう）、『上代言語動態論』（平一七、塙書房）に収載）は、此歌の「風」字がホノカと訓み得るのはこれが「諷」字の省文だからと説き、表記者はあくまでも「諷」字の

意義で記したとする。だが廣岡も「理解レベルにおいてはそういうことが介在したかも知れない」と言うように、訓読の側面と意味の側面とが異なる面を見せつつ同じ一首に重ねられることが、人麻呂の歌の表記の営みにおいてはあり得よう。

(19) 『古語拾遺』の引用は、新撰日本古典文庫『古語拾遺・高橋氏文』（安田尚道・秋本吉徳校註、昭五一、現代思潮社）に拠ったが、一部訓みを改めたところもある。

(20) 西宮一民校注『古語拾遺』（岩波書店、昭六〇）

(21) 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 上代編』（昭四二、三省堂）

(22) 澤瀉久孝「人麻呂集の歌二つ」（『萬葉古徑』三（昭二八、日本書院）に従って「色妙」をイログハシと訓んだが、古写本においては元暦校本や類聚古集、紀州本など次点本系がイロタへ、西本願寺本「シキ」紺青訓（仙覚改訓）以降新点本系がシキタへの訓を記している。

(23) なお先に触れた『萬葉集注釋』はこの表記について「上は借訓で下は正訓で異様な表記になつてゐる。：（中略）：「白鳴」（二・一五八）ならば上下借訓であつて共に認められるが、一方を借訓にして、おまけに「不」を下に書いてゐる點、例の無い書き様である。」と述べるが、「下は正訓」とするよりも、「不」字はシラニヤシラナクの場合と同じく「白」と二字連続する訓假名とするほうが適當かもしれない。日本古典文学全集『萬葉集』の「解説」には「音假名が表意性を帯びるかと思え

ば、正訓が訓仮名のような扱ひを受けることもある。：(中略) …打消のズを表わす不が「去辺白不母」と書かれ、推量のムに用いる「将」が動詞の下にきて「妻裳有将」となったりしたのは後者の例である。」とも指摘される。

(24) 詩体歌の名称に因んで言うならば、本稿に述べた「文字の表意性を統一的に用いることでイメージを喚起させる側面」は詩における押韻と同様の表現としても捉えられよう。これを仮に「縁字」と呼ぶことがもし許されるならば、後の時代に縁語として発達する修辭技法へと接続する糸口をここに見出すことが可能かもしれない。なお「詩体」の語の初出は賀茂真淵『萬葉考』の「柿本朝臣人麻呂歌集之歌考序」及び「万葉集卷四之考序」だが、「助辭を皆略き文字甚少く」した歌の書記法とする定義は受け継ぐものの、本稿ではこの表記を「本人まろはさはせざりけんを」、「詩体をまねて「奈良人」が「後其集を詩などの如く書なせし」ものとは考えない(引用は統群書類従完成会編『賀茂真淵全集』第二卷(昭五二、八木書店)に拠る)。人麻呂歌集詩体歌が漢詩文の文字使用に近い性質とそうでない点との両面を備えていることについては、毛利正守「歌木簡と人麻呂歌集の書記をめぐって」(『萬葉』二〇五、平二一・八)が詳しく、本稿においてもこの語を人麻呂歌集歌の表記の二類のうち、万葉歌や人麻呂歌集歌一般と比較した際に、相対的に漢詩に近い性質を有する側をさすと把握しておく。

(25) 『渡瀬昌忠著作集第一卷 人麻呂歌集略体歌論上』(平一四、おうふう)や稲岡耕二『人麻呂の工房』(平一三三、塙書房)など。

(26) 稲岡耕二『萬葉表記論』(昭五一、塙書房)など。

(27) 犬飼隆「古事記と木簡の漢字利用」(『木簡による日本語書記史』(平一七、笠間書院)や乾善彦「歌表記と仮名使用——木簡の仮名書歌と万葉集の仮名書歌——」(『木簡研究』三一、平二二・一一)、同「万葉集仮名書歌卷の位置」(『萬葉』二一八、平二六・一一)などが、所謂歌木簡の表記と『古事記』や『萬葉集』など上代文献の表記とを比較した際に、木簡の側は一部を除き仮名の清濁を区別しないことや、上代特殊仮名遣いについても区別の意識が薄いことを指摘している点にはここで注意を要する。古事記や万葉歌の仮名は日常的な木簡の文字使用と共通の仮名字母の基盤に立ちながらも、そこに非日常的な表現としての多様な仮名字母の使用をその上に積み重ねるものであり、「上代特殊仮名遣いや清濁をできるだけ区別することなどは、訓みの正確さを求めているように見えるが、木簡のウタ表記でことたりる、：(中略) …むしろ過剰な区別であると考えられる」(乾「万葉集仮名書歌卷の位置」ともいう。人麻呂の名を冠する歌うたで、こうした「過剰な区別」が表現的な理由の存在する場合にのみ優先されなくなることについては、日本語表記史の面からもまた考察が必要だろう。



# 平成二十九年年度 大会案内

◇期日 平成二十九年五月二十日(土)、二十一日(日)、

二十二日(月)

◇会場 奈良女子大学

近鉄奈良駅 一番出口より徒歩五分

〒三〇一八二三 奈良県奈良市北魚屋西町

※大会に関する問い合わせ

奈良女子大学文学部 奥村和美研究室

〒六三〇一八二三 奈良県奈良市北魚屋西町

Eメール kokumura@ccnara-wu.ac.jp

◇日程

二十日(土)

○理事会(午後〇時三十分～一時三十分)

奈良女子大学 S棟二二八教室

○公開講演会(午後二時～四時三十分)

奈良女子大学 講堂

代表理事 東洋大学教授 菊地 義裕

学会挨拶  
挨拶

奈良女子大学古代学術研究センター長 出田 和久

ことばでわかること、ことばがわかること

奈良女子大学名誉教授 奥村 悦三

大伴旅人「遊於松浦河」「領巾塵之鎖」の序と歌を中心に

元お茶の水女子大学教授 萩原 千鶴

○上代文学会賞贈呈式(午後四時三十分～四時四十分)

○総会(午後四時四十分～五時三十分)

○懇親会(午後五時三十分～七時三十分)

会場 奈良女子大学 S棟ラウンジ

会費 五、〇〇〇円(学生・院生三、〇〇〇円)

二十一日(日)

○研究発表会(午前九時三十分～午後三時四十分)

奈良女子大学 S棟二三五大講義室

《午前の部》

日本霊異記中巻の「異界」描写における改変…冥報記との比較を中心に

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)

大学院博士後期課程 孫 世偉

(司会) 大東文化大学教授 山口 敦史

古代舞踊の基礎的考察―久米舞の変容をめぐって―

慶応義塾中等部講師 坂口 楓

(司会) 和光大学教授 津田 博幸

『万葉集』巻十三の三野王挽歌―「犬馬之慕」をめぐって―

奈良県立万葉文化館研究員 大谷 歩

(司会) フェリス女学院大学教授 松田 浩

―昼食―

《午後の部》

高橋虫麻呂の伝説歌四首の諸相―挽歌との関係性―

阿南工業高等専門学校教授 錦織 浩文

(司会) 二松學舎大学教授 塩沢 一平

地震をめぐる「天武紀」の歴史叙述―災異と対策の相関関係―

相模女子大学准教授 山田 純

(司会) 駒澤大学教授 中嶋 真也

『懐風藻』の「春苑 応詔」詩二首―比較によって見えてくるもの―

早稲田大学教授 高松 寿夫

(司会) 日本女子大学教授 田中 大士

二十二日(月)

○臨地研究

※特に学会からの案内はいたしません。

☆大会申し込みなどについては、別途ご連絡の大会案内を  
ご参照ください。